

女の子になりきれないと……



作 恥辱庵
絵 沢木 ゆあ



「ちょっとあなた、鞆の中を見せてくれる？」
「えっ？ 一体なんなんですか？」
「抵抗しないで、ほら、やっぱり持ってたわね」
「そ、それは……」
「小さい女の子のいかがわしい本でしょ。
知らない振りをしても無駄よ」
「そ、そんな！ 身に覚えがありません！」
「言い訳は○童相談所でしてね。
とりあえず署まできてくれるかしら」



「被告の少年を一週間の女の子の処置に処す」

「母さん驚いたけど、まだ更正の余地ありと思われて、軽い処置で済んで良かったね」

「女の子の処置ってなんだよ？」

「それはお楽しみよ。ちよつと恥ずかしいけど頑張ろうね。それよりあんた、本当に小さい子が好きなの？」

「誤解だつて。息子を信じてよ」

「分かったけど、処置はマニュアル通り厳しくするからねそうしないとまた捕まっちゃうわよ」

「つて、なんだよこの格好!?!」

「なんだよつて、結季のお古のお洋服よ」

「だから、俺がなんでこんなのを着なくちやいけないんだよ!!」

「だつて、そう書いてあるのよ。」

「なるべく年齢にそぐわない可愛らしい洋服を着せましようつて」

「なんだよそれ……」

「なんか偉い先生の論文による、小○性愛の治療なんだつて」

「だから俺は違うつていうのに……」

「まあ一週間だけ我慢しなさい」

「マジかよお、こんなのじゃ外にもいけないや」

「んで、今日からアニキは妹になるってことだね」

「違うよ、格好だけだよ！」

「そうでもないのよ」

「えっ!?!」

「振る舞いや言葉遣いも、小さな女の子らしい所作を強要する事。

違反した場合は処置期間が延びるものとする。だって」

「じよ、冗談……」

「そういう訳だから頑張ってね。」

家庭内含めてどこから当局に見られてるか分からないみたいよ」

「ウソだろうっ……」

「ほら、言い直して！」

「う、うそで、うそでしよ……自分で言っけて気持ち悪いよ……」

「でもアニキ似合ってるよ。女顔だし、背も低いし」

「うるさいっ!!」





「早く帰ろうよおっ……」
「何言ってるの、充季の服を買いに来たんでしょ」
「こんなとこ誰かに見られたら……」
「だから、あんまり女の子っぽくない服にしてあげたんでしょ。
当局に見つからなかったらいいけど……」
ほら、このパンツ可愛いわね」
「女の子向けアニメパンツじゃん！」
「だから、一週間はこういうのを着ないといけないの。
まさか結季のお古のパンツを穿かせるわけにもいかないでしょ」
「そんなのごめんだよ」

「お風呂上がったら、ちゃんとキャミとショーツ
着てくるのよ」

「分かったよ！ 何度も言わないでよ恥ずかしいから」

「なんだよ、この格好……まるで変態じゃないか……」

「で、でも思ったよりおかしくないかも……」





「明日でやっと一週間かあ、長かったあ……」
「今日でアニキの妹姿も見納めかあ」「残念そうに言うなよ」
「これで来週から高校にも行けるな。」

まさかこのこと誰かに知られてないだろな」

「いいじゃん、可愛いアニキ、同級生にも見てもらおうよ」

「そんな事になったら俺は恥ずかしくて自殺するよ」

「充季……」「どうしたの母さん？」

「今書留の書類が届いて、あなたの処置期間一ヶ月延長だって」

「えっ……！ どうして……！ こんなに頑張ったのに……！」

「具体的な理由は書いてないけど、

小さな女の子になりきれれていないって……」

「ウソだろう！？ まだ一ヶ月も延長かよ！」

「充季！ 女の子があぐらかかかないの！」

「お前もしてるじゃないか！」

「私はいいのよ。ほら、直さないとまた延長されるよ
そういうところを見られてるんじゃない？」



「どうして俺も……いや、私も一緒なんだよ。母さんが買って来てくれればいいだ、いいでしょ」
「これからは一日数時間は外出させる事って書いてあったのよそれにスカートにも慣れないとね」
「股間がスースーして気持ち悪いよ。いつ捲れるか不安だし」
「女の子のパンツ見られたら恥ずかしいもんね」
「そ、それはそうだけ……」
（そうか、こういうのを感じさせるのが目的なんだ。でも俺はその趣味じゃないんだけどなあ）
「それに今日は本人がこないとサイズが計れないでしょ？」
「サイズを計るってな、なんなのよ」
「ああ、あの店ね。充季、自然にしないでないと逆に怪しまれるわよ」

「第二西鳥△学校の制服ですね。」

見たところ大きいお子さんですけど、転入ですか？」

「ええまあ、そんなところですよ」

「何年生ですか？」

「4年生に転入するんです」

「4年生にしては大きいですね。」

お嬢ちゃんちよつとごめんね。サイズ計るからね」

「ちよ、ちよつと……△学校の制服ってどういうことだよ！？」

「それに4年生って……？」

「来週から通うから揃えないといけないでしょ」

「う、うそだろ！？俺が△学校に……？」

「ほら、言葉が乱れてるわよ」

「う、うそだよ。そんなの恥ずかしくて死んじゃうよ」

「おれ、あ：あたしもう高校生なんだよ」

「一ヶ月だけだから我慢なさい。」

当局に見られたらまた期間が延びちゃうわよ」

「お待たせしました。150サイズで合うかと思いますが、

この年頃は成長が早いので、160にされますか？」

「そうね、ちよつと大きい方がシルエットが可愛いかしら。」

試着してもいいですか」

「勿論です。さあお嬢ちゃんこっちに来てちょうだい。」

ブラウスとスカート穿けたら一度呼んでね」

(こ、ごんなの着方分かんないよ……)



「母さん、お母さん!!」

「はいはい、どうしたの」

「着せてよ。ひもが絡まっちゃって……」

「もうっ、一人でスカートも穿けないなんて甘えんぼさんね

ほら、これでいいのよ」

「次は上着ですね。女の子だから、右が前ね。分かるかしら？」
「上着は男女共用なんですね」

「はい。ただ女の子は胸にリボンが付いています。
可愛くって人気があるんです」

「じゃあ、それも二つほど下さいね」

「はい、用意します。四年生でしたら、赤色ですね。」

「リボンの付け方難しいけどお嬢ちゃんに出来るかな？」
「転入までには練習させます。」

「今日は私がつけてあげるけど、できるようにならないと
恥ずかしいわよ。下級生に笑われちゃうかも。」

「あ、ホントに可愛いですね」

「他にも学用品、お入り用ですか？」

「ええ、体操服に上履き、名札に通学帽とか学校指定のものは
一通り全部下さい」

（待ってくれよ……悪夢でも見てんのかな俺……）





「ハンカチ持った？ 名札もきちんと付けたわね。
ほら早くランドセル背負って、帽子も被りなさい」
「母さん、やっぱ俺無理だよお」
「今更何言ってるの。男の子でしょ、我慢なさい！」
「何矛盾した事を言うんだよ！……」
「大丈夫だよ、アニキどこからみても可愛い△学生女子だよ」
「うるさい！」
「とうとう外に出ちゃった……」
△学生女子の制服で外に出ちゃった……
変に見られてないかな……
こつちの方がよほど犯罪だよ……」



「そういう訳で、一ヶ月だけみんなと一緒に勉強する
月本充季さんです。
短い間だけど、みんな仲良くしてあげてね」
「はい！」
（くっそ恥ずかしい……もうどっか消えてしまいたいよお……）



「ねえ、好きなアニメとかある？」

「好きな洋服のブランド教えてよ！」「きょうだいはいいるの？」

「う、うん……いも、いや……お、お姉ちゃんが一人」

「へえいいなあっ！ お姉ちゃん何年生？」

「ちゅ、□学二年……」

「うわっ、凄くお姉さんだね。もう大人じゃん」

「そ、そうかな……」

（どうして俺、素直にお姉ちゃんなんて言ってるんだよ）

「今度遊びに行つていい？」「そ、それはちよつと……」

「ええっ！ いいじゃん。あたし押し掛けよつと」

「隙ありっ！！」「きゃああつ！！」

「くまさんプリントパンツ見いちやつた！」

「こら、男子！ 転校生になんて事すんのよ！」

「ホント、男子ったらガキなんだから」

「月本さん、大丈夫だった？」「う、うん……」

（怖い……怖かった……男だつてばれたら……）

いや違う……純粋にパンツを見られるのが怖かった……

これが女の子の日常なんだ……

「学校どうだった？」
「う、うん……まあまあ……」
「お友達できた？」
「え、えっと……少しは……そういえば家に来たって」
「来てもらえばいいじゃない。当局の印象も上がるかもよ」
「でも僕の、いや私の男みたいな部屋に入れる訳には……」
「それはそうねえ、ひよっとしてそれも処置が延びた
— 困なのかしら」
「えっ?」

「いつまで起きてるの。小学生は早く寝なさいよお」
「結季、い、いや……お姉ちゃん、分かったよ」
「おっ、素直にお姉ちゃんって言えたね。
学校で何かあった？」
「知らないよ、おやすみ」
「明日は休みだけど、朝寝坊しちや駄目よ」
「分かって、分かってるわよ」



(ん……もう朝か……あれ?なんだか股間が冷たい……!)
「ウ、ウソだろ……もう十何年もしてなかったのに……」

「きつと慣れない生活でストレスが溜まったのね」
「充季さあ、いくらなんでもオネシヨは無いでしょ」
「本当の四年生でもそんなのしないよ」「こ、こめんなさい……」
「可哀想だけど、マニュアル通りにお仕置きしないとね」
「お、お仕置き?」「ええ、書いてあるのよ。おしもの失敗があったら
厳しいお仕置きをしてあげることって」

「で、でも……お仕置きって……」
「オネシヨのお仕置きっていったら、お尻ぺんぺんに決まってるじゃない」
「ええっ!!」「ママ、私がやってもいい?」
「そうね、その方が充季には効くでしょうから」
「や、やだよだ! 妹にお尻を叩かれるなんてやだよおっ!!」
「暴れないで、大人しくしなさいっ!!」「痛いっ!!」
「自分で数を数えなさい。あとお礼も言うのよ!!」「ひっ!!」「一回!!」
「お礼も言いなさいってば!!」
「ひっ!!」「一回い、お尻叩きありがとう!!」
「さいますす!!」
「そうそう。きちんと言えるまで終わらないからね!!」
「あぎっ!!」「二回っ!! お尻叩きありがとう!!」
「さいますす!!」
「声が小さいっ!!」

「いぎやっ……に、二十回……お尻痛いよおっ……もう嫌だよおっ!!」
「少しは反省できたっ!」
「は、はい。こめんなさいお姉ちゃん。」
「充季はオネシヨした事を十分反省しました。」
「もうしないから、お尻を打つのは許し下さる!!」
「仕方ないなあ、ママ、もういいかな?」
「そうね、じゃああと五回だけ」「いやああっ!!」
「よく我慢できたわね。でも今度したらオムツさせるからね。分かった?」
「は、はい……」





「お尻大丈夫？」「うん、少し歩きにくい」
「お姉ちゃんだったら、容赦なく打つんだもんね」
「でも、悪いのは私だから……」「大分、従順になってきたわね」
「で、今日はどこ行くの？」「いいところよ」
「充季の処置期間が短くなるように、ママびったりのところ見つけたの」
「ガールズチアダンススクール？」「ねっ、女の子らしいでしょ」
「誰が習うの？ ママ？ ガールズって書いてあるよ」
「充季に決まってるじゃない」「ええっ！！ さすがにそれは無理だよ！」
「何が無理なの。今日は体験入学してるみたいだから」
「スカート短すぎるよおっ……」
「充季ちゃん、チアのスカートは翻る為にあるのよ。それにパンツも見せパン
って言うて見られてもいいものだから。大人になったら分かるわ」
（それは十分に分かってるんだけど……）
「はい、体験入学のみんな、ほんほんを元気よく振って
音楽に合わせて先生と一緒に踊ろうね」
（ううっ……もう恥ずかしくて死んでしまいそうだよお……）

「どう？ 楽しかった？」
「ママ、どうしても通わなくちゃ駄目？」

「充季が嫌なら仕方無いけど、女の子っぽい活動をするほど処置期間が延びる可能性が減るんだって」

「それなら仕方無いのかなあ……」
「あれ？ 月本くんじゃん」
「お前ずっと学校休んで、どうしたの？」
「っていうか、何その格好。超うけるんだけどw」
「しまった油断してた！」

「だ、誰なの、お兄ちゃんたちなんて知らないよ……」
「充季がいつもお世話になっております。学校のお友達ですか？」
「何言うんだよおっ！」

「あつ、はい。高校の同級生です」
「充季、なんで△学生女子みたいな服着てんだよ？」

「実は充季の趣味なんです。もういい大人の男なんだから止めろって言うてるんですけど聞き分けが無くて」
「マ、ママ！」
「ママだつてw」
「でも可愛いよ、一緒に写真撮ろうよ」
「絶対誰にも共有しちゃ駄目だよ」
「分かってるよ。俺達だけの秘密だ」



「どうしてあんな事言ったんだよ」
「全部説明するの？ 自分が犯罪者だって友達に言うの？」
「それは……」

「やっと明日で一ヶ月だね。ようやく、あたし男の子に戻れるんだね」
「でも大丈夫？ すっかり女の子が板についてしまったみたいだけど」
「これは演技でしてるんだもん。お、お姉ちゃんも私の妹に戻るんだからね」
「はいはい、分かりましたよアニキ」
「充季！」「ママ、どうしたの？まさか……」
「そのまさかよ。あと一年延長だって！」「やだやだやだやだあつ！！」
「でもこれでもう延長は無いみたいよ」「そんな事言ったって……」
「ただし、一年後に不十分だと思われたら……」「思われたら？」
「去勢だつて」「去勢って……睾丸を取られるってこと？」
「男根と共に睾丸も切除して書いてあるわ」
「そ、そんな事されたら本当に女の子になっちゃう！」
「そうなの！ だから充季もう一年だけ頑張つて！」
「もう監視は始まつてるのよ！」「あたし、もう一年も女の子なんだ……」



「またオネショだなんて、何を考えてるの！」
「だ、だって、昨日あんな通知を受けてショックだったから！」
「言い訳は聞きません。新しいマニキュアル通りに
今日からもっと厳しく躾けますからね！」
「まずはオネショを反省しなさい！」
「みんなに恥ずかしい姿見せたらうといいわ！」



「約束通り、今日からオムツよ」
「そ、それだけは許してっ!」
「だあめ、お姉ちゃんと約束したでしょ。それともまたお尻打たれたい?」
「お外に立つ方がいい?」
「そ、それはやだ……!」
「じゃあ大人しくオムツして寝なさい。その方が充季も安心でしょ」
「せ、せめてママがしてよお」
「結季にしてもらった方が恥ずかしくてオネショ治りそうじゃない」

「やっぱりオムツ使っちゃったね
お漏らしお知らせラインが青になってるよ」
「い、言わないで……」
「もう大きいのにオムツ濡らして恥ずかしいね。
隣の三歳の由芽ちゃんだってもうパンツなのに」
「ごめんなさい……もうしないからあ……」
「オムツパンパンじゃない。
よくこんなに漏らして目が覚めないものね……
あれ？ひよつとして充季勃起してる？」
「ええっ!? そ、そんな事……」
「オムツの中に硬いものあるよ」
「だ、だって……お姉ちゃんが触るから……」
「そっか、じゃあ悪い物オムツの中にびゅっびゅっしちゃおうね」
「えっ!?!」



「昼間に勃起したら大変でしょ。
それこそ去勢されちゃうよ」
「去勢やだあ!!!」
「じゃあ、お姉ちゃんが出させてあげるね。足で」
「やっ! やあっ!!! で、出ちゃう!!
オムツの中に出ちゃうよおっ!!! いやああっ!!!」



「ねえ、充季ちゃん男の子だったの?」「しかも本当は高校生だった?」「ええっ! 私たちをだましてたの?」「ど、どうしてそれを……」

「あたしのお兄ちゃんが面白い写真だよって見せてくれたの。そしたら充季ちゃんが映ってて、それが実はお兄ちゃんの同級生の男の子なんだって」

(くっそー! 約束破ったなあ……)

「ねえ、ホントなの?」「……ごめんなさい。みんなにうそついてました」

「そっかあ、まあ別にいいけど」「えっ?」

「だって充季ちゃん可愛いし、男って感じしないもの。なんか幼稚などこもあって妹みたいだし」

「ほ、ホントにいいの?」「うん、今まで通りお友達でいてあげるよ」

「ありがとう!」

(女の子ってこんなに順応力が高くて優しいんだ)

「俺は嫌だぞ」「そうだよ、女装した年上の男と同じクラスだなんて!」

「お前、これからは男子トイレ使えよな。男なんだろ」

「ちよっとお、充季ちゃんをいじめないでよ」

「嘘ついてたそいつが悪いんだろ」

「どうした? 男なら立ちまシヨーンしてみるよ」

「ほらスカート捲ってパンツ下ろしてチ○見せるよ!」

「それとも本当に女の子なのかなあ?」

「だ、駄目……もう我慢できない!」

「あ、こら! 女子トイレは禁止だって!」

「あ! ああ……間に合わなかった……」

「間に合わなかったよおっ!」

「学校でも漏らしちゃったの!？」
「ごめんなさい……」
「さっき先生から連絡があって、明日からは学校にもオムツしてきて下さいって」
「う、うそ……」
「悪いのは充季だから仕方ないでしょ。」
「昼間用のオムツも一応買って置いて良かったわ」
「はい、替えのオムツも用意したから、ランドセルに入れておくわよ」「うん……」
「お漏らししたらすぐに友達か先生に言って替えてもらうのよ」
「自分でできるもん……ていうか、もう漏らさないよ……」
「信用できません。誰かに替えてもらった方がオムツ離れが早いそうよ」
「ねえママ……あたし本当に高校生の男の子に戻れるのかなあ」
「大丈夫よ。きちんと女の子してたら絶対大丈夫よ」
「うん、行ってきます」



「月本、ちゃんとオムツしてきたか？」
「お漏らししたらちゃんとおぎゃーって言って泣くんぞぞ」
「男子達、充季ちゃんだって恥ずかしいんだから黙りなさいよ!」
「大丈夫充季ちゃん、ほら、お漏らし手エックしてあげる」
「で、でも恥ずかしい……」
「実は充季ちゃんママに聞いたのよ。恥ずかしい方がいいって。さっ、自分で頼んでみて」
「あ、亜海ちゃん、みっきのオムツが濡れてないか、チェックして下さい」
「はい、分かったわよ。じっとしてね」
「お漏らしお知らせラインは大丈夫ね。ちょっと触るわよ」
「よし、まだ大丈夫、濡れてるの分かったらすぐに教えてね」
「うん、ありがとう……」



「学校はどうだった？ お漏らししなかった？」

「二回しちゃった……」

「あちゃー、なんでトイレ行かないの？」

「だってトイレ行っても出ないんだもん。」

「それに急にもよおして、我慢できないの」

「ホルモンバランスが崩れてるのかもね。それで誰に替えてもらったの？」

「先生と保健室の校医さん。でも明日からはお友達がしてくれるって。」

「授業が止まって迷惑だから」

「そっか、それは恥ずかしいけど仕方ないね」

「それでね、明日の休みに友達が私の家に来て

オムツ替えの練習をしたって」「それはいいわね」

「でも、前にも言ったけど私の部屋男の時のままでしょ。」

「どうしよう……結季の部屋貸してもらえるかな……」

「心配しなくても大丈夫よ。」

「こんな事もあるうかと、屋間に業者さんに来てもらったの」

「えっ？」

「充季の部屋、改装したから」

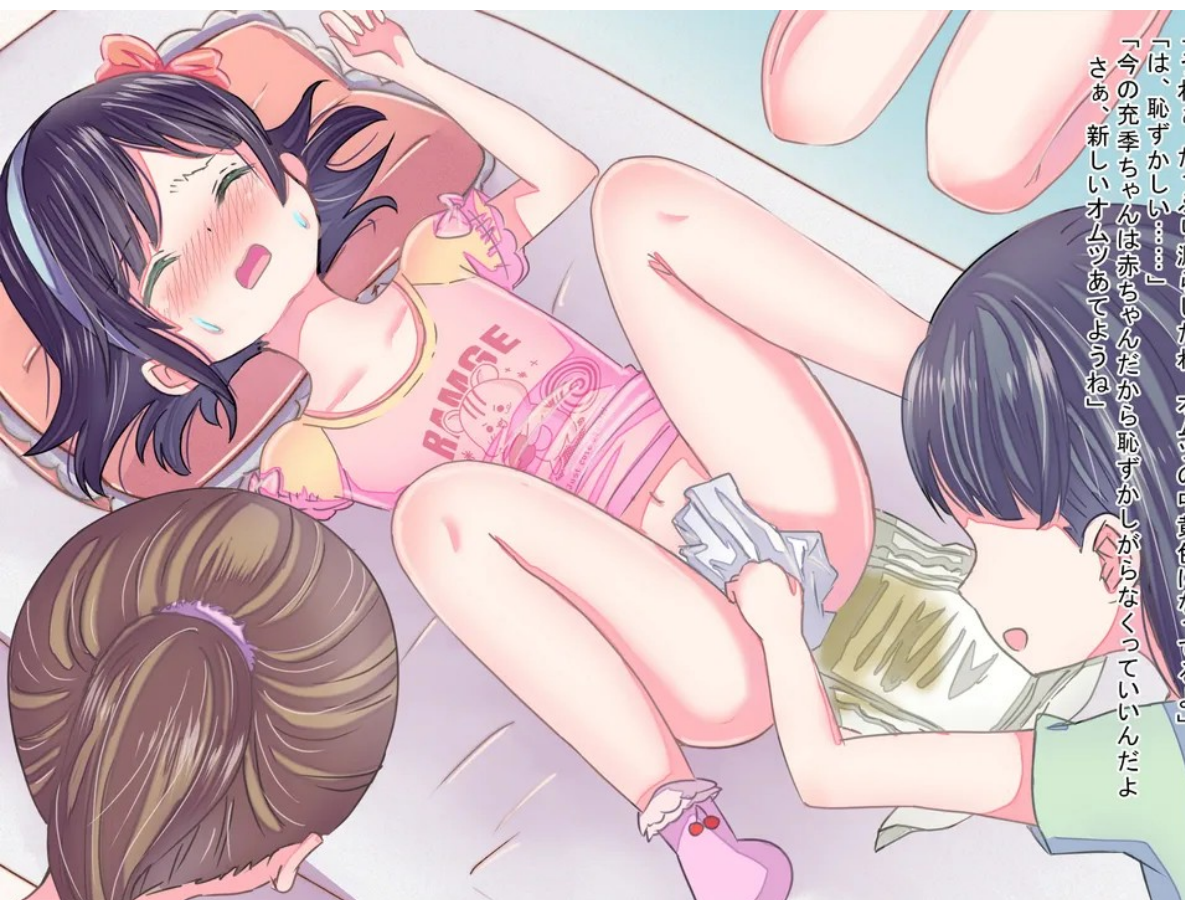
「ええっ！」

「か、完全に女の子の部屋だ……僕の私物は？」

「安心なさい、戻ったら返してあげるから。」

「ほら、この学習机も可愛いでしょ」

「う、うん……でもなんだかこの部屋で過ごすの恥ずかしいな……」



「やっほー、充季ちゃん遊びにきたよおっ！」
「いらっしやい！ さあ上がって！」「やあ、妹がいつも世話になってるね」
「あ、こ、こんにちは！」「充季ちゃんのお姉さん、凄く格好いいね」
「自慢のお姉ちゃんだもんね」
「や、やだなあ……」
「わあ、可愛いっ！ 女の子らしくて充季ちゃんらしいよ」
「じゃあ早速オムツ替えの練習しようか。今もオムツあててるの？」
「う、うん……最近ずつと漏らしちゃうから」
「仕方ないなあ。今も濡れてるんでしょ」「どうして分かったの!?!」
「お漏らしお知らせラインが水色になってるよお。さあ、ベッドに寝転がって」
「う、うん……」
「うん、そしたら前当てを広げて。あたし小さい妹がいるから慣れてるの」
「うわあ、たっぷり漏らしたね。オムツの中黄色になってるよ」
「は、恥ずかしい……」
「今の充季ちゃんは赤ちゃんだから恥ずかしがらなくていいんだよ
さあ、新しいオムツあてようね」



「オムツ替えの時は両手は耳の横。それで、もつと足を広げさせて」

「亜海ちゃん慣れてるう、お母さんみたい」

「えへ、そしたらオムツ拭きシートで股間を綺麗にしてっ」と

「あ、ああんっ!」「やだっ! 充季ちゃんったら変な声出さないでよ」

「だ、だって、あそこに触るから……」

「ああ、おちんちんね。充季ちゃん本当に男の子なんだね。」

「小さくって気がつかなかったけど」「亜海ちゃんの意地悪……」

「えへ、次はベビーパウダーをほんほんってして……新しいオムツを用意したら、両足を持ち上げてオムツを お尻の下に敷き込むの」

「わあっ、亜海ちゃん力持ちい!」

「充季ちゃんが軽いだだけだよ。本当に赤ちゃんみたい」

「そしたら前当てをあてておちんちん隠してえ」「感じちゃ駄目だよ充季ちゃん」

「う、うん……」

「横羽のシールを剥がして、お腹の前で留めるの。きつくない充季ちゃん?」

「うん大丈夫、ありがとう」

「最後に股周りのフリルとギヤザーを整えて完成よ。」

「どう? 充季ちゃん新しいオムツ気持ちいい?」

「うん、とっても気持ちいいよ。」

「充季のオムツ替えてくれてありがとう。亜海お姉ちゃん」

「お姉ちゃん?」「あっ! ごめんなさい、つい!」

「そっか、いつもお姉さんに替えてもらってるんだね。でもいいよ私たちの事もお姉ちゃんと呼んでくれて」

「もうっ意地悪っ!」



「せんせー！ 充季ちゃんがオムツ濡らしちゃいましたあ！」
「また漏らしたの？ 最近は一時間おきにお漏らしして本当に赤ちゃんね。長居さん、月本さんのオムツ替えてあげてくれる？」
「はい、分かりました！」
「さあ充季ちゃん、オムツ替えようね。濡れて気持ち悪いでしょ」
「やっぱりみんなの前だと恥ずかしいな」
「赤ちゃんは恥ずかしがらなくていいの。」
折角教室の中にオムツ交換台を用意してもらったんだから」
「うん、分かった。亜海お姉ちゃん、四年生にもなってお漏らししちゃったみっきのオムツ替えて下さい」



「私たちだけでお出かけなんてドキドキするね」
「もう四年生なんだもん、これくらい大丈夫だよ」
「わたし欲しい服があるから、お小遣いもらってきちゃった」
「ええっ！いいなあ。私も欲しいゲームあるのにい」
「みつきちゃんは欲しいものあるの？」
「え、えっと……」
「大丈夫？ オムツ濡れちゃった？」
「う、ううん……まだちっちゃくない」
「出たらすぐに言うのよ。お外だとオムツ替える場所あまりないから」
「うん、ありがとう優愛おねえちゃん……」
「どうしたの、元気ないけど」
「えっと……あたし、オムツ見えてない？」
「そんな事気にしてたんだけ」
「だって、ママったらこんなに短いスカート選ぶだもん」
「心配ないよ。誰かに気づかなくても私たちが守ってあげるから」
「うん、ありがとう」



「あれ、優愛じゃん。こんなとこで何してんの」
「お兄ちゃん！友達と遊びにきたんだよ」
「最近はお兄ちゃんもいるから気を付けるよ。」
「そっちは学校の友達？」

「はい、優愛ちゃんのクラスメイトです」
「つて、おいおい、充季じゃんか！w」

「すっかり溶け込んで気がつかなかったぜ」

「ほんとだ、月本くんすっかり女の子してるんだね」

「しかし相変わらず幼稚園児みたいな格好だな」

「あれ？月本くん、スカートの下何かはいてるの？」

「い、いや……これは……」

「男の子なのに恥ずかしくないですよ。」

「よしよし、高校生の姉さんがファッションチェックしてあげる」

「や！やめて！」

「えっ！？オムツ！？月本くんオムツしてるの！？」

「や、やだ……みないで……あぁ……」



「もう大丈夫だよ、みつきちゃん」
「そうだよ、怖いお姉さん達も行っちゃったし」
「オムツも新しいのに替えたから、楽しく遊ぼうよ」
「ありがとうみんな」
みつき、お姉ちゃん達のことだいちゅき！」
「んふふ。すっかり私たちの妹になっちゃったね」
「じゃあ、ゲーセンでもいこっか！」
「あっ、あたし欲しいぬいぐるみあるの！」



「これで良かったのよね」

「そだね、去勢はされなかつたけど、アニキの選択なんだもん」

「でもまさか、このまま女の子でいたいなんて……」

「ほら、そろそろ始まるよ」「わあ、可愛いっ!」

「あつ、これアニキだよ、凄い目立つ場所にいるよ!」

「このキ〇ズチアダンス大会って全国放送なのよね?」

「さすがに私もちょっと恥ずかしいわ」

「何言ってるの。どこにだしても恥ずかしくない美少女だよ」

「ほら、辿々しい振り付けがまた可愛らしいし」

「ホント、他の小さな子の方が巧いわね。でも結季の言うとおり、

一番無邪気で天使みたいね」

「そだよ、これからも二人で可愛がってやろうよ」

「ちよつと女の子にさせて可愛がりたいだけだったのに、

元々素質があつたのかしら。今は少しだけ罪悪感感じちゃう」

「えっ? ママ、何か言った?」

「ううん、あつ、オムツ見えちゃった」

「全国の人に、アニキのオムツ姿見られちゃったね♥」











